

外来看護実習における多職種連携についての学び

○西園理恵 嘉数知子 久米幸代 岸田朱三 関西看護専門学校

I. はじめに

厚生労働省は2025年を目途に、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。在院日数の短縮が進み、医療施設と居宅を結ぶ機能として外来の果たす役割が多岐にわたるようになった。現在、地域での療養生活を支えるために療養者と家族は様々な社会資源を活用してサービスを受けている。継続した看護を行うには施設内の多職種との連携だけではなく、施設外の多くの職種と連携することが必要不可欠であり、外来の役割が拡大するとともに外来看護師の役割も比例し大きくなっている。地域で保健医療福祉を担っている職種との連携が必要な現状を踏まえ、当校では、在宅看護論実習として、地域連携部門を含めた外来実習を4日間行っている。実習目的は、外来看護師の役割や、連携の必要性を学ぶことであるが実際に多職種との連携について学生がどのように学びを得ているのか明らかにしたいと考えた。また課題を明確にすることで、今後の指導に活かしたいと考え、分析を行った。

II. 研究方法

在宅看護論実習（外来）の学生の学びのレポートについてテキストデータ分析ソフトKH Coderを使用し、テキストマイニングを用いて分析した。このソフトを使用し、頻出語を検索するとともに、ある言葉と一緒に使われていることが多い「共起語」を共起ネットワークとして抽出することで語と語の結びつきを探索した。また、学生の実習時期と学びの内容の特徴をみるため、実習期間を夏季休暇前の上半期と休暇後の下半期にわけ、対応分析をおこなった。対象者は、2018年度在宅看護論実習（外来）を終了した3年生91名である。

III. 倫理的配慮

研究について趣旨に賛同していること、匿名性、プライバシーの保護、不利益のないことを説明し書面で同意の確認を行った。当校倫理委員会からの承認を得た。

IV. 分析結果

学びのレポート頻出語（表1参照）は「患者」「学ぶ」「連携」「必要」「地域」「役割」「他職種」などがみられる。各頻出語共起ネットワーク（図1参照）

の語句の中心は「患者」であり、「外来」「行う」「感じる」が重なっている。これらの語句は頻出回数の平均が273.2であり、共起関係が強い。「患者」の周囲には「看護師」「医師」「連携」「診察」「他職種」とあり、診療の介助場面の語句の頻出度が高い。

表1 学びのレポート頻出語リスト

順位	語句	頻出回数	順位	語句	頻出回数	順位	語句	頻出回数
1	患者	1515	26	外来看護師	122	56	多職種	83
4	連携	541	34	安心	104	60	在宅	79
5	看護師	491	35	看護	104	65	退院	72
7	外来	328	41	MSW	98	80	継続	56
9	医師	253	42	支援	97	92	訪問看護師	47
10	情報	232	43	自宅	96	98	外来看護	45
11	生活	229	47	情報共有	93	100	入退院支援室	44
14	診察	214	52	帰る	86	138	目標	30
15	地域	211	53	退院後	85	153	退院支援	25
19	他職種	150	55	連絡	83	155	望む	25

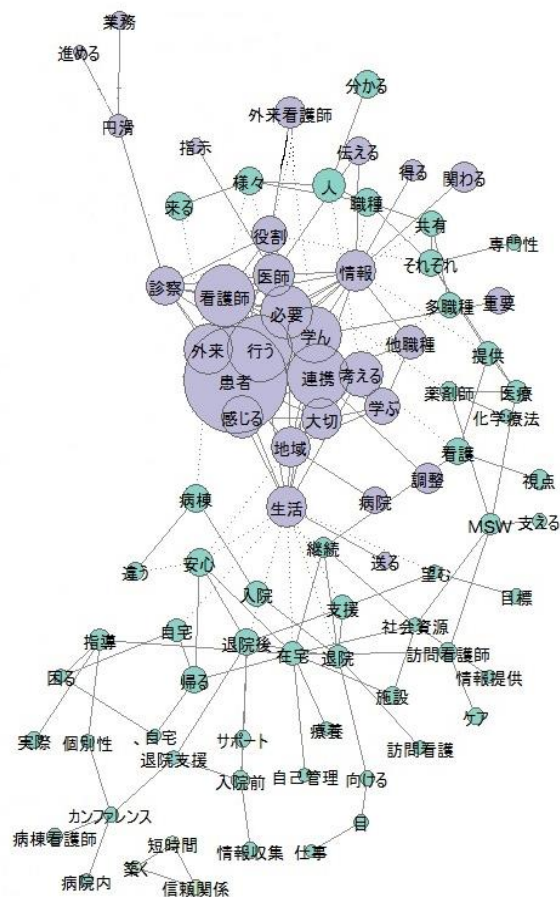


図1 各頻出語共起ネットワーク

一方、頻出回数の平均85と下がるが、「安心」「自宅」「支援」「情報共有」「在宅」「退院」「多職種」「継続」なども頻出語として挙げられ、これらは「在宅」「退院」を中心に共起ネットワークの中で色々な語

句が散在してはいたが、強い共起関係にあった。上記の共起ネットワークでは「他職種」であったのが、こちらでは「多職種」の語句が抽出されている。頻度は低いが「望む」「目標」の語句も挙がっている。

学生の実習時期と頻出語の対応分析（図2参照）では、上半期・下半期の中央に「他職種」が見られているが、上半期は、「処置」「見学」「安全」「相談」などの語句が目立ったのに対し、下半期では、「多職種」「調整」「継続」「生活」といった語句が見られた。

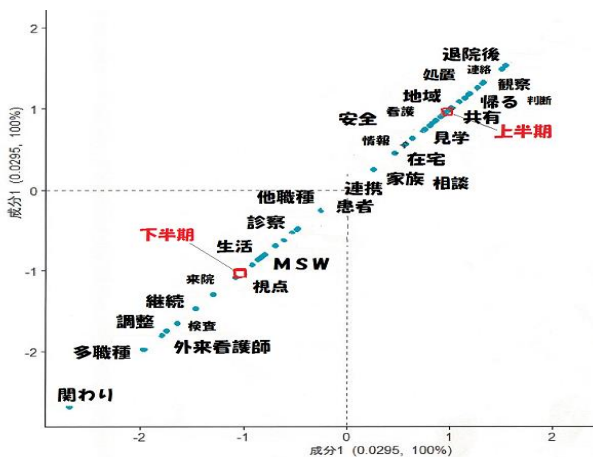


図2 実習時期の対応分析

V. 考察

多くの学生は外来看護師の役割を診察室への呼び込みと医師の診察の介助と捉えており、これは自らの受診時の経験から外来看護を考えたときに得ている学生の中で一般化された知識である。そのため、外来実習を行っていくにあたり、診察室での看護師の役割を診察の介助と感じ取り、短い時間の中で、診察や検査がスムーズに実施されるための連携が大事であると学ぶことはできている。しかし、現在の外来看護師は、入院後の治療計画や退院支援と情報共有などから対話を通して患者が入院治療に主体性を高める役割ももつ。川添¹⁾は、「生活と医療を統合する継続看護マネジメントの視点に基づいた外来看護の役割が重要である」と述べている。退院後も自立した生活を継続してできるように病態や生活状況の変化を予測して院外の関係者との連携をとるといふ、外来看護師として支援が必要となっている。継続看護における多職種連携は外来看護師の役割として必要であるため、より多くの学生に学んでほしいと考える。

学生は、実習期間中に診療科、退院調整カンファレンスへの参加や看護外来等でローテーション実習を行い、毎日のカンファレンスにおいてリフレクションし情報共有の必要性や多職種との連携の重要性の学びを深めていたと考える。頻度は低いながら「望

む」「目標」の語句もあがっていることから患者が望む生活を実現するための支援が必要であると学べた。ただ共起関係は強いとは言え、施設内で学んだ他職連携に比べ「退院」「自宅」「継続」の語句の頻度が低い。学生の中では外来看護の実際は見たが考えを深めることまで至らない学生も多くいたと推測する。

対応分析からは実習時期において特徴があることがわかった。上・下半期の中央に「他職種」があり、このことは期間に関係なく外来看護師の役割である施設内での情報共有や連携をしている実際を学生各々が学びを深めているものと考えられる。一方、下半期では、「生活」「継続」「多職種」の語句が多く、対象は生活者であり、療養生活を支えるために多くの職種との連携が必要だと考えられている。

菊池²⁾は「学生は実習を経験していくなかで看護職者らしいものの見え方や臨床への向かい方を学んでいる」とし、また「実践の場にいる／実践する⇒見え方が変わる⇒理解が進化する、という学習の流れが存在する」と述べている。学生も実習の経験を重ねることで、ものの見え方が進化し、患者とは治療が必要な存在という理解だけにとどまらずその背景にある社会的事情も知り、地域で生活し地域に帰るべき生活者であると理解できていたからと考える。

さらに「臨床の知」とは臨床の場において目の前の対象者とのかかわりのなかで培われ、看護師の身体に獲得されていくもの、と目黒³⁾は説明している。下半期の学生が対象をそのように捉える認識に至ったのは、対象者とのかかわりのなかで初学者が習熟していく過程であり、実習における臨床の場でしか培われない、まさに「臨床の知」を獲得したと言える。

VI. まとめ

課題として、学生は「連携」をとらえるだけでは、生活者としての繋がりが分かりにくいということがわかった。そのため地域での療養生活を支えるための場に外来があることを強調し学びの視点を明確にしたうえで実習に臨むよう指導していく。

引用文献

- 1) 川添恵理子：地域包括ケア時代に外来看護で求められる能力，日本看護協会機関誌看護，Vol.70No.1,71,2018.
- 2) 菊池麻由美：看護職者らしさを支える知覚,看護教育,Vo57.No.12, 2016.
- 3) 目黒悟：看護教育を拓く授業リフレクション,メヂカルフレンド社,135,2010.
- 4) 樋口耕一：計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望,社会学評論 68 卷 3 号, 334,2017.